

ご案内

日時 2003年11月15日開催

会場 慶應義塾大学病院 新棟11階 大会議室
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35 TEL 03-3353-1211

- ★JR総武線「信濃町」駅前です
- ★お車でのご来場はご遠慮下さい
- ★新棟11階大会議室への経路：病院正面玄関から入り、直進してエスカレーター裏手の新棟エレベーターをご利用下さい
なお当日は休診日ですので、正面玄関が開いていない場合は右手の救急入口よりお入りください

受付 大会議室前に参加受付を設けます。受付開始は12時からです。
参加費2000円を納入し、名札兼領収書をお受け取りください。
★本年度会費（5000円）未納の方は納入をお願いします。

進行 12:30開始18:10終了予定

- ★発表時間12分質疑応答8分
- ★教育セミナー：60分
- ★ビデオ撮影はご遠慮ください

JR山手線

*東京 駅から中央線快速をご利用の場合は

四谷で総武線にお乗換え下さい

第13回認知リハビリテーション研究会 プログラム

開会の辞

慶應義塾大学 鹿島 晴雄

I 部 高次脳機能障害のリハビリテーション 12:30~13:10

座長:慶應義塾大学 里宇明元

1 高次脳機能障害者を想定した職務の課題分析例

障害者職業総合センター ○戸田ルナ 剱田文記

2 作業評価課題におけるエラーと補完手段に関する分析

障害者職業総合センター ○戸田ルナ 剱田文記
埼玉障害者職業センター 青野香代子

II 部 外傷性脳損傷のリハビリテーション1 13:10~13:50

座長:早稲田大学 坂爪一幸

3 POCR (プロセス指向認知リハビリテーション)の神経認知機能 改善への意義について

“神経生理所見からみた脳外傷後遺症全経過から”

東京医科歯科大学難治疾患研究所	○中村俊規	岡田幸之	尾形広行
獨協大学保健管理センター			中野隆史
同医大越谷病院脳神経外科			好本裕平
同救急医療科			池上敬一
HGC心理教育研究所			吉本武史

4 POCR (プロセス 指向認知リハビリテーション) の臨床コスト

“脳外傷後遺症社会復帰までの医療経済学的比較と将来への展望”

東京医科歯科大学難治疾患研究所 ○中村俊規 尾形広行 山上 皓 岡田幸之
埼玉県総合リハビリテーションセンター 先崎章
国立医療・病院管理研究所 西村秋生
獨協大学保健管理センター 中野隆史
同医大越谷病院救急医療科 池上敬一

休憩 13:50～14:00

III部 教育セミナー 14:00～15:00 座長:慶應義塾大学 加藤元一郎

『概念、語の意味はいかに獲得されるか』 慶應義塾大学環境情報学部今井むつみ

休憩 15:00～15:20

IV部 外傷性脳損傷のリハビリテーション2 15:20～16:00

座長:東京都リハビリテーション病院 本田哲三

5 東京都高次脳機能障害者社会復帰支援プログラムにより 復職した外傷性脳損傷の一例

早稲田大学教育学部 ○坂爪一幸
東京都リハビリテーション病院 本田哲三 吉村茂和 倉持 昇 朝比奈朋子
高崎健康福祉大学健康福祉学部 高橋玖美子

6 練習帳および聞き書き取り教材を用いた外傷性脳損傷者の記憶訓練結果

TBIリハビリテーション研究所 ○藤田久美子 藤井正子

V部 空間認知障害のリハビリテーション 16:00～16:40

座長:慶應義塾大学 村松太郎

7 道順障害を呈した右頭頂葉皮質下出血の一例

-独居生活復帰に向けたリハビリテーション-

慈泉会相澤病院総合リハビリテーションセンター ○村山幸照 原寛美 尾関 誠

8 低酸素脳症後にバリエーション症候群を主とした認知障害を認めた一例について

市川市リハビリテーション病院リハビリテーション部 ○宮崎晶子 松野友美

岡本朝美 永田雅章

慶應義塾大学医学部精神神経科 加藤元一郎

休憩 16:00～16:50

VI部 記憶障害のリハビリテーション1 16:50～17:30

座長:相澤病院 原 寛美

9 Proper name anomia を呈した症例に試みた学習訓練の効果について

慈泉会相澤病院総合リハビリテーションセンター ○貝梅由恵 原 寛美 尾関 誠 青木理恵

10 Semantic dementia 例に対する語彙再獲得訓練

愛媛大学医学部神経精神医学 ○小森憲治郎 石川智久 池田 学 田辺敬貴

11 右半球損傷2症例における記銘課題のSPTs効果について

日常記憶の改善に向けたアプローチの指標としての一考察

所沢リハビリテーション病院リハビリテーション部 ○杉山あや

12 実生活に近い行為を課題内容としたミニデー課題による展望記憶訓練について

東京都リハビリテーション病院相談科心理 ○南雲祐美

慶應義塾大学医学部精神神経科 加藤元一郎 鹿島晴雄

慶應義塾大学文学部心理学科 梅田聡

閉会の辞

東京都リハビリテーション病院 本田哲三

発表要旨

1 高次脳機能障害者を想定した職務の課題分析例

障害者職業総合センター 戸田ルナ

高次脳機能障害者の就労支援場面にて職務遂行を支援する際には、職務の課題分析に基づき個々人の障害に配慮した職務の構造化ならびに綿密な指導計画が欠かせない。今回は、職業リハビリテーションにおける高次脳機能障害者の職務の課題分析事例を報告する。

2 作業評価課題におけるエラーと補完手段に関する分析

障害者 職業総合センター 勿田文記

高次脳機能障害者が作業評価課題を行った時に見られるエラー内容とそれらに対する補完手段について整理・分析し、効果的・効率的な訓練・指導方法(トータルパッケージ)のあり方について検討し報告する。

3 POCR(プロセス指向認知リハビリテーション)の神経認知機能改善への意義について

“神経生理所見からみた脳外傷後遺症全経過から”

東京医科歯科大学難治疾患研究所 中村俊規

過去6年間に全経過の観察・介入を行った脳外傷症例55名において、SPECT上、全脳平均血流は一旦正常値上限まで上昇し低下、40ml/100g/min前後に安定していた。脳波スペクトル上はδ波成分比率の高いものほど社会復帰が限定的で、α成分が少なくβ成分比率の高いものでも社会復帰が安定しなかった。上記神経生理所見とPOCRによる心理介入時脳波データとから、我々の心理的介入の妥当性を検証した。

4 POCR (プロセス 指向認知リハビリテーション) の臨床コスト

“脳外傷後遺症社会復帰までの医療経済学的比較と将来への展望”

東京医科歯科大学難治疾患研究所 中村俊規

過去6年間 獨協越谷病院にて経過の観察・介入を行った脳外傷症例55名において、我々の認知リハビリテーションをコスト的観点から比較検討した。対象施設は、国内では当院と、埼玉と神奈川の県立リハビリテーションセンターなど。医療経済的検討にはオズワルドモデルを採用し、コスト 効果分析を臨床コストと福祉コストの両面から検討を加えた。これに予後要因を加えて、POCRIによる認知リハビリの医療経済的妥当性を検証した。

5 東京都高次脳機能障害者社会復帰支援プログラムにより 復職した外傷性脳損傷の一例

早稲田大学教育学部 坂爪一幸

外傷性脳損傷後の復職例を検討した。症例は47歳男性。公務員。外傷性脳損傷。両側前頭葉底部の血流欠損と左側頭葉底部の血流低下。遂行機能障害。復職に必要な職務実行能力を職場で評価して指導した。情報の取捨選択や重みづけの能力が低下して資料作成や説明に困難を示した。代償手段としてパソコンのアイデア・プロセッサによる情報の視覚的構造化・思考過程の外在化の指導と職場の環境調整を実施した結果、現職に復帰した。

6 一酸化炭素中毒による重度認知機能障害例に対するリハビリテーション

TBIリハビリテーション研究所 藤田久美子

脳外傷による記憶障害のリハビリテーションでは、外部記憶補助による代償訓練が行なわれることが多いが、本研究では、認知訓練の練習帳および聞き書き取り教材を用いて、直接訓練による記憶力そのものの回復を試みた。対象者3名中1名は、受傷から3年後に在宅で認知訓練を開始し、8ヶ月で、リバーミード行動記憶検査の標準プロフィール点が、12点(=中等度障害)から19点(=正常値ボーダーライン)まで改善した。

7 道順障害を呈した右頭頂葉皮質下出血の一例

-独居生活復帰に向けたリハビリテーション-

慈泉会相澤病院総合リハビリテーションセンター 村山幸照

これまで道に迷うといった症状は地誌的見当識障害や地誌失認等とよばれてきたが、近年では「道順障害」と「街並失認」とに分類・整理されており、その道順記憶の想起の訓練法についても紹介されている。今回われわれは右頭頂葉皮質下出血により、目の前の風景が何であるかわかり、自分が今どこにいるかはわかるものの、そこからどの方向に行けば目的地があるかわからないといった道順障害を呈した独居生活の男性一例を経験した。本症例は建物・標識などのランドマークの認知は保たれていたため、道順をたどる上での指標としてリハビリテーションを継続した結果、独居生活が可能となった。本症例の経験を踏まえながら、道順障害に対するより効果的な訓練について若干の考察を加えて報告する。

8 低酸素脳症後にバリエーション症候群を主とした認知障害を認めた一例について

市川市リハビリテーション病院リハビリテーション部 宮崎晶子

症例は50歳右利き男性。2002年11月胸痛出現し意識消失、急性心筋梗塞による心室細動と診断された。翌年1月「見え方、ものの立体感覚がおかしい」という主訴で当院外来訓練開始。神経心理学的所見ではWAIS-R:VIQ93、PIQ56、地誌的失見当、書字障害、喚語困難、失行が認められた。Frostig視知覚発達検査では錯綜図の見分け、空間関係課題での低下が顕著で、視覚認知レベルでの障害（特に複数の対象を同時に処理することが困難）があり、軽度のバリエーション症候群が疑われた。SPECTでは両側の前頭葉、頭頂葉に血流の低下が認められた。本症例について症状及び訓練の経過について報告する。

9 Proper name anomia を呈した症例に試みた学習訓練の効果について

慈泉会相澤病院総合リハビリテーションセンター 貝梅由恵

これまでProper name anomia (固有名詞失名辞) に対しては、有名人や歴史上の人物における人名学習訓練の研究報告が多いが、社会生活を営む上では、日常生活上かわりのある人物の人名想起の学習訓練方法の試みが必要であると思われる。今回われわれが経験した症例は、35歳男性、右利き。左側頭葉(下側頭回)に局限した出血によりProper name anomiaを呈した。本症例に対し、実際に会話をした病院スタッフ30名の写真を用いて、各10名ずつ①反復訓練、②エピソード訓練、③ゴロ合わせ訓練を行った。それぞれの訓練効果について若干の考察を加えて報告する。

10 Semantic dementia 例に対する語彙再獲得訓練

愛媛大学医学部神経精神医学

小森憲治郎

我々は、側頭葉の限局性萎縮に伴うsemantic dementia (SD)例に語彙の再獲得訓練として、伊藤ら(1994)による9カテゴリーの線画呼称・指示課題を教材に用いた訓練を試みている。この課題を用いた訓練においてSD例では比較的短期間である程度の語彙の再獲得が可能であるものの、学習意欲に個人差が大きく、維持される情報は様々である。これまでに経験した7例の訓練成績について報告し、SDにおいて獲得される語彙の特徴と病態や経過との関連について考察する。

11 右半球損傷2症例における、記銘課題のSPTs効果について

日常記憶の改善に向けたアプローチの指標としての一考察

所沢リハビリテーション病院リハビリテーション部

杉山あや

エピソード記憶の障害が日常行動の支障を来している右半球損傷2症例に、被験者実演課題 (Subject- performed tasks,以下SPTs)と言語教示課題(Verbal tasks,以下VTs)の2条件で教示文の記銘を行った。その結果2例ともSPTs成績がVTsに比べ有意に良好であった。本結果に関し、自ら行なうことが記憶情報の符号化と検索に与える影響について検討し、日常記憶の改善へのアプローチの手がかりとなる可能性について若干の考察を加える。

12 実生活に近い行為を課題内容としたミニデー課題による 展望記憶訓練について

東京都リハビリテーション病院相談科心理南雲祐美

展望記憶は未来に行うべき行為の記憶であるが、社会生活を営む上でも重要な記憶であり、また脳損傷例の社会復帰に際しても重要となる。今回われわれは、復職のためのスケジュール管理をめざして、展望記憶であるミニデー課題を用い、また患者自身の実生活に近い行為を課題内容として、健忘例に対するリハビリテーションを施行した。訓練を通して模擬的な1日のスケジュールの経験が学習され、自らの行動を管理する能力が上昇したと考えられた。